

第16節

वैयासकिश्च भगवान् वासुदेवपरायणः ।
 उरुगायगुणोदाराः सतां स्युर्हि समागमे ॥ १६ ॥

vaiyāsakiś ca bhagavān
vāsudeva-ṣarāyaṇaḥ
urugāya-guṇodārāḥ
satām syur hi samāgame

vaiyāsakiḥ—ヴァーサデーヴァの子; *ca*—もまた; *bhagavān*—超越的知識に満たされて;
vāsudeva—主クリシュナ; *ṣarāyaṇaḥ*—〜に執着して; *urugāya*—偉大な哲学者たちに讃えら
 れている人格主神シュリー・クリシュナの; *guṇa-udārāḥ*—偉大な気質; *satām*—献愛者たち
 の; *syuḥ*—〜だったに違いない; *hi*—事実として; *samāgame*—〜の存在によって。

ヴァーサデーヴァの子であるシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、超越的な知識に満たされ、ヴァスデーヴァのご子息である主クリシュナの偉大な献愛者でもありました。ですから、偉大な哲学者や献愛者に讃えられていた主クリシュナについて話しあいがなされたはずです。

要旨解説

この節にある *satām* (サターンム) にはとても重要な意味がこめられています。 *Satām* (サターンム) は「純粋な献愛者」という意味で、主に仕えることしか望まない人物を指します。そのような献愛者との交流だけをとおして、主クリシュナの超越的な栄光について話しあうことができます。主みずから言っていることですが、主の話題は精神的な重要性に満ちており、サターンムとの交流をとおして主について正しく聞けば、まちががなく強い力を感じ、自然に献愛奉仕の生活に入っていくことができます。すでに説明したように、マハーラージャ・パリークシットは生まれたときから主の偉大な献愛者であり、それはシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーも同じです。両者とも同じ境地にいるのです——マハーラージャ・パリークシットは宮殿での生活になじみ、かたやシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは典型的な放棄階級の生活にいた人物で、衣服さえまとわない生活をしていたのですが。話をきくかぎりマハーラージャ・パリークシットとシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは正反対の状況にいるように見えますが、主の純粋無垢な献愛者であるという点でふたりは共通

しています。そのような献愛者が集まれば、主の栄光を話しあうこと、つまりバクティ・ヨーガ以外の話しあいはなされません。『バガヴァッド・ギーター』でも、主と、そして主の献愛者アルジュナが話したとき、バクティ・ヨーガ以外の話題はしませんでした（通俗学者は自分流の推測をするのですが）。この節で、ca (チャ) のあとに *vaiyāsakiḥ* (ヴァイヤースキヒ) が置かれているのは、シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーによると、すでに決められていたように、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは師、マハーラージャ・パリークシットは弟子という立場だとしても、じつは両者とも同じ境地にいたのです。主クリシュナが話題の中心人物ですから、*vāsudeva-parāyaṇaḥ* (ヴァースデーヴァ・パラヤナハ) 「ヴァースデーヴァの献愛者」ということばは、主クリシュナという共通の目標を指しています。マハーラージャ・パリークシットが絶食をしていた場所にはほかにも数多くの人々が集まっていたのですが、主クリシュナを讃える話題以外になにも話されなかった、と結論づけることができます。話していたのがシュカデーヴァ・ゴースヴァーミー、聞いていた中心人物がマハーラージャ・パリークシットだったからです。ですから、主の二人の主要な人物によって語られて聞かれた『シュリーマド・バーガヴァタム』は、至高主、人格主神、シュリー・クリシュナを讃えるためにあるのです。